

日本のオペラ2020

石田麻子

1. 2020年はどんな年だったのか

2020年は長く記憶される年となるだろう。第二次世界大戦後の日本において、これほど長い期間、表現活動だけではなく、あらゆる生活行動が制限されるようなことはなかったと言ってよい。ところが2020年は突然、日本のみならず世界中の公演が、一定の期間完全に消滅した。

日本のオペラ公演を追い続けてきた本年鑑として、この状況をどのように記録するべきなのかについて、『日本のオペラ年鑑』の編集委員会、およびオペラ研究所での協議を重ねてきた。その結果、本年鑑では、コロナ禍の中でおこなえたこと、逆にできなかったことを記録して、何が守られたのか、そして何が失われたのかを検証する方針が確認された。

とりわけ中止の公演を記録する作業は急がれた。実施が発表されていた公演であっても、中止決定後の入場券払い戻し期間が終了すると、計画されていた公演の情報は世の中からほぼ消えてしまう。実施発表前の段階の場合は、公演情報そのものが世の中に出ることはない。これらの事態は十分に予測されていたため、オペラ公演を通じて日本の文化芸術活動を定点観測している本年鑑の使命として、公演実施、中止、延期の記録を同時に進めていった。この作業を通じて日本の社会がコロナ禍の中でたどった道筋をオペラの世界からとらえていくことになったのである。

1-1. 2020年コロナ禍の前

本稿は、18ページからのオペラ研究所編による「年表でみる新型コロナウイルス感染症と日本のオペラ界（2020年）」の表も参照し

ながら、お読みいただきたい。2020年も1月および2月の前半は例年通り、各地で劇場主催、団体主催による大小規模のオペラが上演されており、活発に各組織の公演活動が継続していくのだろうと思われた。その後の突然の非常事態で社会状況が大きく変わった2月後半以降の、公演中止、延期、再開も時系列でとりあげながら、オペラの世界で何が起きたのか振り返っていこう。

1-2. 年明けとともに活発な公演活動がはじまる（1月～2月）

1) 大規模なオペラ団体による活動

日本オペラ振興会の事業部の一つ日本オペラ協会は、寺嶋民哉作曲《紅天女》の委嘱初演で2020年の活動を開始している。Bunkamura オーチャードホールで、1月11日から15日まで連続5回の公演を計画した。新制作とはいえ、新作の日本オペラ上演において、これは極めて異例なことだ。原作者の美内すずえが、漫画雑誌で1976年から連載を開始した『ガラスの仮面』は長期連載にも起因して、幅広い年齢のファンがいる。《紅天女》は同作の作中劇を題材としており、多くの観客が期待できるとしたことが大規模会場で5回公演を企図した理由である。日本オペラ協会・総監督の郡愛子の大胆なプロデュース力が生きた。同公演は、園田隆一郎指揮、馬場紀雄演出、梅若実玄祥特別演出振付による。上演時間約3時間40分の大作には、台本のカットなど作りこみが必要との評も出たものの、華やかな舞台の展開に歌手達の熱演もあって、次の上演に期待をつなげる結果となった。

日本オペラ振興会のもう一つの事業部である藤原歌劇団は「2020 都民芸術フェスティバル」として柴田真都指揮、松本重孝演出による《リゴレット》を、2月1日、2日に東京文化会館で2公演、2月8日に愛知県芸術劇場で1公演の計3公演実施した。オーソドックスな演出での上演は近年の藤原歌劇団公演の特徴の一つとも言える。これらがコロナ禍前の日本オペラ振興会最後の上演となった。

2020年の東京二期会は、《椿姫》を2月19日から23日まで4回公演を実施。これも、他団体と同じく「2020 都民芸術フェスティバル」の参加公演である。東京都交響楽団、ジャコモ・サグリパンティ指揮、原田諒演出による。東京二期会はこれまでも本公演に宝塚歌劇団所属の演出家を起用しており、原田も宝塚歌劇団に所属、菊田一夫演劇賞受賞などの実績を持つ人材だ。若い演出家の仕事は、宝塚のレビューの要素を取り入れ、音楽、物語を丁寧にまとめていた。東京文化会館の舞台上には松井るみによる比較的シンプルな舞台装置が飾られた。

ちょうど、東京芸術劇場がタイミングを同じくして、読売日本交響楽団と《ラ・トラヴィアータ》を上演したこともあって、2つの在京オーケストラの演奏比較も興味深いものとなった。同公演が、東京二期会が演出上の制約なく上演できた最後の舞台となる。

2) 地域におけるオペラ団体の制作

関西では、年明け早々に地域の大規模会場と中・小規模会場でオペラ団体が公演を実施した。まず1月11日と12日には、堺シティオペラが、フェニーチェ堺大ホールで第34回定期公演《アイダ》を実施している。フェニーチェ堺は、2,000席を持つ大規模な会館である。地元で活動するオペラ団体だとはいえ、単独主催で2回公演を成立させるのは大変な仕事だっただろう。同上演で令和2年度

の大阪文化祭賞を受賞している。牧村邦彦指揮、ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団、粟國淳演出による。

同じ1月11日、12日には、《オペラを作ろう！小さな煙突掃除やさん》が関西二期会と灘区民ホール共催による「共同サロンオペラ vol.7」と題して実施された。さらに、関西二期会と東大阪市文化創造館を運営しているPFI 東大阪文化創造館(株)の共催により、《カヴァレリア・ルスティカーナ》と《パリアッチ(道化師)》が2月22日と23日に開催される。この上演がコロナ禍の蔓延にともなう行政の自粛要請のもと、綱渡りの開催となった背景は後述する。

このほかにも地域のオペラ団体の活動が記録されている。大規模会場では、1月13日につくばオペラが《こうもり》をつくば市ノバホール大ホールで、2月8日、9日にオペラ実行委員会ヴィータ◆ムジカレ◆東広島が《アイダ》を、東広島芸術文化ホール くらら大ホールで実施している。2月16日の文京シビックホールでの文京区民参加オペラ《カルメン》は、NPO法人チッタディーノオペラ振興会と(公財)文京アカデミーの協働による上演だった。

中小規模会場では、1月25日、26日に江東オペラが第41回公演《コジ・ファン・トゥッテ》を豊洲文化センターシビックセンターホールで上演した。2月1日、2日は新宿区民オペラが実験劇場と題して《修道女アンジェリカ》と《ラ・ボエーム》(ハイライト)を新宿文化センター小ホールで、2月9日には芦屋市民オペラが《魔笛》を芦屋市民センタールナ・ホールで同日2回開催している。

オペラシアターこんにゃく座の本公演は、萩京子作曲《イワンのぼか》が2月6～11日に豊島区あうるすぽっとで8回公演実施されている。社会に対する痛烈な批判を込めたトルストイの原作を活かした台本・演出は坂手

洋二による。戦争、行き過ぎた資本主義などを風刺して、今日的な課題を観客に見事に届けた。

3) 劇場・音楽堂等のオペラ制作

オペラ団体単独主催が日本のオペラ制作の主流だった時代から、劇場や音楽堂とオペラ団体との協働がおこなわれるようになり、さらに劇場・音楽堂等が主催するオペラの中に、大規模な定期公演や特徴をもつ大小規模の公演も増えてきている。2020年1月～2月にもそうした特色ある公演が多数実施された。

新国立劇場の年明けの上演は1月のパオロ・カリニャーニ指揮の《ラ・ボエーム》、2月のアントネッロ・アッレマンディ指揮の《セビリアの理髪師》公演である。2020年、新国立劇場が海外から障壁なくアーティストを招聘、実施した公演はここまでとなる。

びわ湖ホールは「オペラへの招待」シリーズで、日本語による《こうもり》をとりあげた。秋山和慶指揮、日本センチュリー交響楽団、中村敬一演出による。1月10日～13日に4回公演を実施した。同日程で、先述の堺シティオペラ、関西二期会の公演もおこなわれていて、関西地区でオペラ公演が複数重なった。

ロームシアター京都（サウスホール、1月18日）と神奈川県立音楽堂（1月25日）が、アレクサンドル・デスプラ作曲《サイレンス》を日本初演した。『ハリー・ポッターと死の秘宝』『英国王のスピーチ』などの映画音楽の作曲家による小規模編成の室内楽伴奏つきのフランス語による室内オペラである。ルクセンブルクのアンサンブル・ルシリンによる演奏。原作は川端康成の『無言』で、川端文学と「日本の文化」へのまなざしが海外で創造された舞台作品を通じて感じられるのは、こうした逆移入作品の受容における常だ。同

公演はそうした上演の成果があがった点に加えて、ルクセンブルク市立劇場制作のこの舞台が2020年唯一の招聘オペラ公演となった点も、意図せず記録されることになった。

足利市民会館が1月26日に《カルメン》を大ホールで公演、専属のプロフェッショナル団体「足利オペラ・リリカ」の第6回定期公演として実施したものだ。

ひろしまオペラ・音楽推進委員会は、2月15日、16日に細川俊夫作曲《松風》を上演した。川瀬賢太郎指揮、岩田達宗演出、広島交響楽団、半田美和子や藤井美雪らの出演によるアステールプラザ中ホール（能舞台）での上演である。細川は「Hiroshima Happy New Ear」の音楽監督を務め、自作をはじめ現代音楽を紹介する企画を続けており、同公演は第18回佐川吉男音楽奨励賞を受賞している。

大規模な国内共同制作オペラは、2つのプロジェクトがおこなわれた。

（公財）札幌市芸術文化財団（札幌文化芸術劇場hitaru）／（公財）神奈川県立音楽堂（神奈川県民ホール）／（公財）愛知県文化振興事業団（愛知県芸術劇場）／（公財）東京二期会／（公財）札幌交響楽団／（公財）神奈川フィルハーモニー管弦楽団／（公財）名古屋フィルハーモニー交響楽団による共同制作で、札幌文化芸術劇場hitaruでの2020年1月25日、26日の《カルメン》は2019年度企画である。神奈川県民ホールと愛知県芸術劇場との協働によるもので、この札幌公演がこの共同制作事業の最終公演となった。

白河市／白河文化交流館コミネス（NPO法人カルチャーネットワーク）／（公財）金沢芸術創造財団 金沢歌劇座／（公財）東京都歴史文化財団 東京芸術劇場／（公財）石川県音楽文化振興事業団（オーケストラ・アンサンブル金沢）／（公財）読売日本交響楽団による《ラ・トラヴィアータ》がおこなわれた。2月9日の白河文化交流館コミネス大ホール、2月

16日の金沢歌劇座、2月22日の東京芸術劇場コンサートホールでの上演となったが、これはまさにコロナ禍直前のこと。演出にダンス界からニブロールを主宰する矢内原美邦を起用、指揮者はヘンリック・シェーファーが務めた。演出に異分野の人材を招くのは海外でも頻繁におこなわれる手法である。分野横断による創造の化学反応を期待してのことで、今回の芸術的成果は賛否両論が混在していたとはいえ、ダンスファンや関係者の来場が見取れるなど、観客層の広がりについては企画意図どおりとなった。

4) 教育研究団体の公演

例年、2月は大学の修了公演などが多数開催される。2020年も多くの大学がモーツァルトの作品などを中心に公演実施した。偶然とはいえ、2020年2月15日に同志社女子大学、京都市立芸術大学、大阪音楽大学が《フィガロの結婚》の公演を、それぞれ学内施設でおこなっている。京都市立芸術大学と大阪音楽大学は2月16日にも同作品を上演した。

5) 演奏会形式

2月15日に東京文化会館の主催で加藤昌則作曲・編曲・ピアノ、藤木大地の歌による《400歳のカストラート》が小ホールでおこなわれた。バロック作品、モーツァルトからマーラー、プーランク、加藤の新作に至るまで、歌唱作品のみならず器楽作品も含めて構成された舞台となった。同公演は12月13日に宮崎県立芸術劇場演劇ホールでも上演されている。

2月19日、21日、23日に、チョン・ミョンフン指揮の東京フィルハーモニー交響楽団により《カルメン》が演奏会形式で上演された。オーケストラが演奏会で取り上げると、音に集中できる。同公演も声の作品としての魅力がくっきりと立ち上がった。

1-3. コロナの感染拡大がはじまる：2月

例年通り新しい年の幕開けとなった2020年。その勢いが突然止まるきっかけとなったのは、各自治体による各種のイベント中止要請である。1月15日に日本国内で初めての新型コロナウイルス感染者が認められたことが、翌16日に厚生労働省から発表された。そののち、横浜湾に停泊中のクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」で、多数の新型コロナウイルス感染者が集団発生するなど、一気に日本国内での感染が拡大していく。

大規模公演をまとめた公演表には、関西二期会の2月22日、23日の東大阪市文化創造館 Dream House 大ホールでの公演実施が記録されている。同会館では、翌日の他公演を最後に、ほぼすべての演奏会や催しが中止になっている。これは、2月18日付の府知事発表の文書で、大阪府が主催し、府民が参加するイベントを中止あるいは延期決定したことによる。関西二期会との共催公演はその宣言下での開催だった。これ以降、関西圏でのオペラ公演はしばらくの間、完全に途絶える。

首都圏でも事態は大きく動いた。2月22日に、東京都が主催する屋内でのイベントなどを原則中止、あるいは延期措置をとることが発表されたのだ。政府は2月26日に自粛要請を発出する。同日に予定されていたアイドル・グループ *perfume* の東京ドーム公演が中止となったのをはじめ、各地の劇場や音楽堂、団体や個人のアーティストたちは、計画していた公演の中止、延期を余儀なくされる。この日を境に舞台上演の灯が次々と消えていった。

1) 2月27日からの動き

2月27日から3月1日まで内幸町ホールで開催が予定されていた東京オペレッタ劇場のオフエンバック作曲《パリの生活》が千代田区からの要請により公演中止となり、映像

収録へと切り替えられた。この映像のDVDは、チケット購入者が希望すれば、返金に替えて送付することが発表された。

2月28日に、東京・なかのZERO小ホールで昼夜2公演予定されていた東京オペラ・プロデュースのマスネ作曲《シンデレラ》も無観客上演となり、舞台の映像収録のみとしたうえで、チケット購入者への収録映像のDVD配布あるいはチケット代の返金へと切り替える措置がとられた。さらに2月28日から3月1日まで予定されていた新国立劇場オペラ研修所による《フィガロの結婚》3公演が中止となる。川崎市昭和音楽大学ユリホールでは、2月28日に予定された『日本のオペラ作品をつくる』の公開審査会が非公開に切り替えておこなわれた。

翌2月29日、3月1日に、神奈川県立音楽堂主催で日本初演が予定されていたヘンデル作曲《シツラ》は公演中止となる。2月26日付の神奈川県立音楽堂の公式ホームページでは、「新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、文化庁より、公演の実施について中止等の対応を図るようとの通知を受けたことによる」と発表された。そのため、来日して本番を迎えるばかりだったファビオ・ビオンディ率いるエウローパ・ガランテは作品を上演することなく帰国を余儀なくされたのである。

2) 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール

ちょうどこの時、滋賀県立芸術劇場びわ湖ホールでは4年間にわたる巨大プロジェクトの集大成となる上演のタイミングだった。沼尻竜典指揮、ミヒヤエル・ハンベ演出で毎年1作品ずつ上演してきた「ニーベルングの指環」から《神々の黄昏》上演を3月7日、8日の2日間に予定していたのである。関係者には完結したいという思いが強かっただろう。ただし、やはり有観客での上演は断念せざるを得ない。その代替措置として無観客公演お

よびYouTubeによる同時配信をおこなう。各日のDVDも発売され、こうした一連の成果によって、第68回菊池寛賞、第51回ENEOS音楽賞洋楽部門本賞（滋賀県立芸術劇場びわ湖ホールと沼尻竜典）、関西元気文化圏賞特別賞などを受賞した。

ただし同公演は本年鑑の公演表には収録していない。新型コロナウイルス感染症が拡大して以降、配信に切り替えたり、当初から配信を目的とした上演が計画されたりするようになっていく。同時に、配信プラットフォームも多種多様なものが出てきたために、インターネット配信による公演事業を捕捉しきれず、全ての活動を追跡することが困難だとの判断からである。

《神々の黄昏》の2回公演は、国内外の41万人以上といわれる同時視聴者を得て、以降の舞台芸術創造活動の配信事業への転換の契機ともなった。コロナ禍における劇場の活動として大きな一石を投じるものとなったことは間違いない。本年鑑では、同公演を指揮した沼尻竜典芸術監督のインタビューにより記録している。

3) 社会の動きの停止によって浮き彫りになった実演舞台芸術の弱点

こうして、日本全国の公演活動が、ろうそくの灯が消えるように次々と止まった。大規模会場での公演は3月18日、19日のオペラシアターこんにゃく座による萩京子作曲《アルレッキーノ—二人の主人を一度に持つと—》のまつもと市民芸術館主ホールでの公演が2020年前半最後の記録となった。中・小規模会場でも、3月21日、22日のオペラシアターこんにゃく座オペラ塾修了公演を最後に完全に公演活動が止まっている。3月24日には、東京オリンピック・パラリンピックの1年程度の延期決定が発表され、大規模な催事は完全に停止することになる。

外出自粛要請がおこなわれるなかで、生活の維持に必要な行動以外は自粛、「三密」を避ける、ロックダウンなどの言葉であらゆる制限が課せられた。4月7日から5月6日の間は、大都市を抱える都府県中心に、さらに厳しい緊急事態宣言が発出される。この措置は結果として、5月25日まで延長された。この間、教育機関は対面での通常授業ができなくなり、オンライン授業への切り替えを余儀なくされ、民間企業や官公庁もリモート勤務の導入などで人流を止める措置がとられた。

同時に各地の劇場や音楽堂等が休館、公演の中止や延期が続出することになる。4月7日の東京都の緊急事態宣言の発出にともない、東京文化会館が4月9日から5月10日までの休館を発表する。ロームシアター京都や京都コンサートホールは4月10日から5月19日までの休館となった。全国の多くの会場で同様の措置がとられた。その後も幾度となく発出された緊急事態宣言を受けた公演延期や中止の措置により、各館の担当者は発売済のチケットの払い戻しなどの対応に追われることになる。自ら企画の実現に向けて奔走してきた公演の中止を告げ、事態を收拾せざるを得ない立場に置かれた担当者たちの想いはいかばかりだったのだろうか。出演が予定されていたアーティスト、公演製作にかかわったスタッフたちに驚きと共に無念さ、そして大きな不安を生んだに違いない。東日本大震災直後の公演中止を思い出したという関係者の声も多く聞かれた。

オペラをはじめとする公演活動が停止することで影響を受けたのはどんな人たちだったのだろうか。団体に所属しているとはいえ基本フリーランス活動が主体となる声楽家、また指揮者はマネジメント会社に所属していたとしても、演出家など同様にフリーランスである。さらには企業に所属したり、プロダクションごとの契約に基づき活動したりする

舞台スタッフ人材もいる。このような歌手、器楽奏者、指揮者、演出家などのアーティスト、舞台関連のスタッフたちは、オペラのみならず各種公演の中止や延期を受けて仕事を失った。創造活動にかかわる人たちへの緊急時における保障、および労働環境整備の不備を明るみにしたのがコロナ禍だった。政府や地方自治体による緊急支援措置が開始されると、公演のキャンセル対応に加えて、今度は各種支援金申請にも翻弄されることになる。

1-4. コロナ禍で失われた公演たち：3月～8月

1) 大規模な劇場の公演計画

新国立劇場は前述の研修所公演に加えて、3月以降に予定されていた《コジ・ファン・トゥッテ》、さらに新制作だった《ジュリオ・チェーザレ》、《ホフマン物語》《サロメ》の各公演が全て中止となる。

6～7月に3か所の会場で7回予定されていた東京文化会館と新国立劇場、さらにザルツブルク・イースター音楽祭、ザクセン州立歌劇場との国際共同制作による《ニュルンベルクのマイスタージンガー》公演は延期となる。同公演は、2020年に予定されていたオリンピック・イヤーの文化プログラムのなかでも、とくに大規模な計画だった。数多くの歌手たちが歌い演じる「三密」の象徴のような作品である。日本国内のみならず、世界中で、この作品が上演できる日が来るのかと思わずにはいられない事態に一気に追い込まれていった。

新国立劇場では、高校生のための鑑賞教室の《夕鶴》、地域招聘オペラ公演として計画されていたびわ湖ホールによる沼尻竜典作曲《竹取物語》、新制作の予定だった渋谷慶一郎作曲、島田雅彦台本による《Super Angel》公演も延期となった。こうして、3月から8月までの主催公演が全て中止に追い込まれる。

この期間に中止になった大規模会場での他

の公演をいくつかあげておこう。日生劇場は6月に予定していた《セビリアの理髪師》の学校公演および一般公演がすべて中止となった。びわ湖ホールは、《竹取物語》の先述の国立劇場での公演、びわ湖ホール「オペラへの招待」シリーズでの実施予定がいずれも中止された。さらに、日生劇場制作により各地で実施される「NISSAY OPERA 2020」《セビリアの理髪師》を「沼尻竜典オペラセレクション」として11月に実施予定だったものの、これも中止となった。兵庫県立芸術文化センターは毎7月に実施する佐渡裕芸術監督プロデュースオペラに《ラ・ボエーム》を予定していたが全8公演が中止された。

2) オペラ団体

4月の東京二期会公演は《サムソンとデリラ》(セミ・ステージ形式)が延期となり、6月に予定されていた東大阪市文化創造館での関西二期会《リゴレット》、日生劇場での藤原歌劇団《フィガロの結婚》、7月の東京二期会による《ルル》は翌年以降に延期などの対応が次々に発表となる。

各地域のオペラ公演も軒並み中止となった。立川市民オペラ2020《トゥーランドット》(2021年3月にハイライトで上演、配信も実施)、伊丹市民オペラ《アイーダ》、沖縄オペラアカデミー《ジャンニ・スキッキ》(2021年5月に延期して上演、配信も実施)《テレフォン》はいずれも3月に予定されていた公演がすべて中止、さらに4月には鹿児島オペラ協会の《フィガロの結婚》(2021年3月に延期して実施)、5月には稲城市民オペラの《愛の妙薬》(2021年8月に延期して実施)、広島オペラアンサンブルの《カルメン》が中止となっている。7月には北九州シティオペラがトリエステ・ヴェルディ歌劇場と共同制作する予定だった《トゥーランドット》が中止となっている。

3) 音楽祭

音楽を動機として人びとが集うことを目的におこなわれる国内各地のフェスティバルも、軒並み中止となる。

東京・春・音楽祭2020は3月27日以降の全演奏会が中止となった。東京文化会館大ホールで予定されていたイタリア・オペラ・アカデミー、リッカルド・ムーティ指揮《マクベス》、子どものためのワーグナー《トリスタンとイゾルデ》、マレク・ヤノフスキ指揮《トリスタンとイゾルデ》、スペランツァ・スカップッチ指揮のプッチーニ「三部作」(演奏会形式)、さらに東京藝術大学奏楽堂での加藤昌則指揮、ブリテン作曲《ノアの洪水》がすべて中止されたのである。

近江の春びわ湖クラシック音楽祭2020が全面中止となり、《ジャンニ・スキッキ》が実施されなかった。

第58回大阪国際フェスティバル2020 飯守泰次郎×関西フィル「ワーグナー特別演奏会」は翌年1月に延期される。2020セイジ・オザワ 松本フェスティバルなどでのオペラ公演の中止も発表され、演奏会形式のハイライト公演やこどものためのオペラ公演などが2020年にはおこなわれなかった。

4) 人材育成公演、オーケストラの公演と海外招聘公演の中止

人材育成を目的とした公演もおこなわれていない。小澤征爾音楽塾オペラプロジェクトXⅧは3月に《こうもり》を予定していたが中止となり、同じく3月に予定されていた足利オペラ・リリカ修了演奏会も中止、洗足学園音楽大学、相愛大学など各地の音楽系大学が年度末にかけて予定していた学生公演もおこなえなかった。同3月の大阪芸術大学の学生公演は無観客での上演を収録した。4月以降の新学期からは各大学ともにリモートでのレッスンなどに奔走することになる。

近年増えていたオーケストラの定期演奏会でのオペラ公演も中止を余儀なくされている。3月に予定の東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団の《トスカ》は延期が発表されたが、結局声楽のない交響曲に曲目変更して実施された。5月には日本フィルハーモニー交響楽団のラフマニノフ作曲《アレコ》がアレクサンドル・ラザレフ指揮で予定されていたが中止、7月に予定されていた読売日本交響楽団のセバ스티アン・ヴァイグレ指揮の《ワルキューレ》も中止となっている。

招聘オペラは歌劇場が来日できなくなり、次々に中止を発表していく。この期間には6月に予定されていたアンドレア・バッティストーニ指揮によるパレルモ・マッシモ劇場《ナブッコ》《ノルマ》が中止となった。

1-5. コロナ禍から公演の再開へ：6月～8月

1) 再開に向けた動き

東京都交響楽団が6月11日、12日に音楽監督の大野和士とともに、再開にむけてエアロゾル測定をおこなった。クラシック音楽公演運営推進協議会ほか器楽や客席における検証のために7月に実験、8月に結果公表のち、声楽・合唱に関しては9月に実験、12月に結果を公表している。

これに先駆けて、5月に全国公立文化施設協会、6月にクラシック音楽公演運営推進協議会がそれぞれ新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドラインを策定公表、同じく6月には「合唱活動における新型コロナウイルス感染症拡大防止のガイドライン」が全日本合唱連盟から発表された。それらの順守を前提としながら、徐々に演奏会が開始されていく。

コロナ禍の最中である6月28日に、最初の声楽を伴った演奏会が東京文化会館大ホールでおこなわれる。5月28日の演奏会が延期されていたものだ。東京音楽コンクールの歴代入賞者である村上敏明、与儀巧、宮里直樹、

小堀勇介が「テノールの饗宴」と題した演奏会に出演した。会場ではあらゆるディスタンスを配慮して、緊張をともなったものとなったが、声の演奏再開に向けた機会として数多くの報道がなされた。

7月11日には東京二期会によるコンサート「希望よ、来たれ！」が同じく東京文化会館大ホールで開催された。これは7月10～12日に同会場で公演予定の《ルル》が翌年8月に延期されたことを受けての代替措置で、同企画は、文化庁委託事業「令和2年度戦略的芸術文化創造推進事業」としての実施である。これは沖澤のどか指揮、東京交響楽団による演奏で、東京二期会所属のベテランから若手の声楽家たちが出演した。久しぶりの大ホールでの歌唱となったこともあって、ベテラン歌手でさえ、会場の大きさと自分の声のバランスを探るような様子だったことが印象的であった。

2) 各地で少しずつ上演が再開されていく

こうして少しずつではあるが演奏会が再開していく。中でも最も遅れたのが、動きを伴う声楽上演、すなわちオペラの本公演である。コロナ禍が収束する気配のないなか、2月26日以降の自粛要請や緊急事態宣言などを経て最初のオペラ公演の記録となったのは、7月11日の茅ヶ崎おやこ劇場主催によるオペラシアターこんにゃく座の萩京子作曲《タンゲーまほうをかけられた舌―》だった。

関西では、7月22日に和歌山市民会館小ホールで和歌山市子ども劇場主催により、7月23日に阪南市立文化センター大ホールで子どもNPOはらっぱの主催で、オペラシアターこんにゃく座の《タンゲーまほうをかけられた舌―》公演がおこなわれた。次に、8月8日に堺シティオペラによる《ルサルカ 人魚姫の物語》が堺市立西文化会館ウェスティホールで実施されている。

大規模会場で演出を伴うオペラ公演の本格的再開は、**藤原歌劇団**の《カルメン》である。「川崎・しんゆり芸術祭 2020 アルテリッカ しんゆり」での公演が延期されていたのが、8月15日～17日の3日間、あらためて実施されたものだった。この時は収容定員の50%以下に入場が制限された。テアトロ・ジーリオ・ショウワでの上演は、舞台奥に高く組んだ壇上に合唱を配置、オーケストラはその前の舞台上で演奏、ソリストたちはさらにオーケストラの前の限られたスペースで演技するかたちをとった。歌手たちは透明ビニールの衝立を動かしながら、フェイスシールドをつけたうえで、互いの間隔を保ちつつの演唱となった。

8月30日には**東京文化会館**が小ホールで《アマールと夜の訪問者》を上演した。岩田達宗の演出により、子どもたちも上演に参加しておこなわれた。加えて、歌手たちが客席入口から演唱しながら入場する場面もあるうえに、舞台上でも相当数の歌手たちが演技するなど、上演までの主催者側の苦労は並大抵のものではなっただろう。このプロダクションは、12月25日に**兵庫県立芸術文化センター阪急中ホール**で再演されている。

1-6. コロナ禍の中での公演実施：9月～12月

1) 何が実施できたのか

9月3日～6日には新国立劇場で**東京二期会**による《フィデリオ》が、新国立劇場合唱団、藤原歌劇団合唱部が参加して4回上演される。この公演の指揮者は、入国がかなわなかったダン・エッティンガーから大植英次に変更のうえ実施された。

10月には**新国立劇場**のシーズン公演が《夏の夜の夢》で開始されたが、海外からの招聘者はなく日本人キャストでの上演となる。海外からのアーティスト招聘が困難な状況下で、国内のアーティストたちが大規模な上演

にキャスティングされる機会が増えた。出演予定の公演が中止となるケースが多かったアーティストにとって、一方で大きな作品にかかわるチャンスにもつながったと言える。この上演に関しては、本年鑑収録の新国立劇場の村田直樹常務理事へのインタビューでも詳細が言及されている。

同劇場は、その後は2020年内のシーズン・プログラムを予定通りの日程で上演している。10月27日、28日に新国立劇場高校生のためのオペラ鑑賞教室（関西）でウィリアム・ケントリッジ演出の《魔笛》を園田隆一郎指揮で上演した。藤倉大作曲世界初演の《アルマゲドンの夢》には演出のリディア・シュタイアーに加えて、主演の歌手たち、加えて英国在住の藤倉大が来日、規定の隔離期間を経て上演にかかわった。世界的な危機のなかで、新国立劇場が国際的に比肩する新作を送りだした画期的な上演となったことが特筆できる。11月15日、18日、21日、23日の全4回公演を芸術監督の大野和士が指揮した。

新国立劇場年内最後の予定公演となった11月29日～12月6日までの《こうもり》にも指揮者をはじめとするアーティストが来日して上演がおこなわれた。同プロダクションは、その後、札幌文化芸術劇場 hitaru に移動して12月13日、15日に2回おこなわれている。

11月25日～29日には日生劇場で、**東京二期会**の《メリー・ウィドー》が沖澤のどか指揮、眞鍋卓嗣演出により上演された。このうち25日は、プレビュー公演として、26日～29日の本公演に先駆けておこなわれたものである。

このほか、11月28日は**東京文化会館**主催事業としてヴォルフ作曲の歌曲集を岩田達宗の演出により舞台化した《ヴォルフ イタリア歌曲集》が上演されるなど、企画公演も徐々

に開催されていく。

2) 共同制作公演

劇場・音楽堂等の共同制作は秋以降、2つの大型プロジェクトが実施された。

まず、東京芸術劇場、北九州芸術劇場、ミューザ川崎シンフォニーホール共同制作事業である。この三者により、2015年に全国での上演実績のある野田秀樹演出による《フィガロの結婚～庭師は見た！～》がおこなわれた。9月19日から11月1日まで4公演予定されていたものだ。海外からの招聘歌手たちが来日できないため、「外国人アーティスト（文化芸術関係）の入国制限緩和」を求めて関係者が政府に働きかけをおこなったものかなわらず、結果として日本国内に拠点を置く歌手たちがキャストイングされて上演されている。また、同公演は共同制作支援事業による助成ではなく、各劇場・音楽堂の自主事業として、「劇場・音楽堂等機能強化推進事業」による助成を活用している。

次に、(公財)神奈川芸術文化財団(神奈川県民ホール) / (公財)大分県芸術文化スポーツ振興財団(iichiko 総合文化センター) / 山形県総合文化芸術館 [指定管理者: みんぐるやまがた] (やまぎん県民ホール) / (公財)東京二期会 / (公財)神奈川フィルハーモニー管弦楽団 / (公社)山形交響楽協会(山形交響楽団)の共同制作による《トゥーランドット》である。10月17日～31日にかけて、神奈川県、大分県、山形県の各地域の会館を運営する法人と地域のオーケストラに、東京二期会が制作で加わり実施されたものである。大島早紀子による演出で舞台上でのダンサーたちの動きが、広い舞台空間を埋めて効果的な舞台となった。

3) 各地での上演再開

9月8日からはオペラシアターこんにゃく

座による寺嶋陸也作曲《末摘花》が俳優座劇場で10回公演された。

関西では9月13日に豊岡演劇祭での中堀海都作曲《零(ゼロ)》公演がおこなわれ、みつなかオオペラが10月10日、11日に景山伸夫作曲《満仲～美女丸の廻心》を牧村邦彦指揮、井原広樹演出により上演している。

10月10日、11日の昭和音楽大学《ドン・ジョヴァンニ》は、予定のイタリア人演出家や指揮者などが来日できないなか、イタリアからのリモートによる演出指示を日本側で演出助手が学生たちに直接伝えながら準備が進められた。極力密集を避けるために、演出内容や学内設置のオペラ劇場の舞台上に台座を組んで段差をつくり、指揮者は日本人に変更しておこなわれた。10月17日、18日の国立音楽大学の《皇帝ティートの慈悲》も学内ホールで公演が実施されている。一方で、後述するように多くの大学が公演を中止しており、この時期の公演実施は判断が分かれた。

よこすか芸術劇場では、10月18日に能の『隅田川』と鈴木優人指揮、弥勒忠史演出によるブリテン作曲《カーリユー・リヴァー》が連続上演された。能とオペラというジャンルの枠組みを越えた上演に多くの観客が足を運んだ。

12月25日には兵庫県立芸術文化センターで《アマールと夜の訪問者たち》が2回公演おこなわれている。これは8月30日に東京文化会館で実施された岩田達宗演出のプロダクションである。

4) 演奏会形式など

8月に入るとびわ湖ホールの芸術監督沼尻竜典オペラ指揮者セミナーⅦ～《ヘンゼルとグレーテル》、9月になると五島記念文化賞オペラ新人賞の研修成果発表会が実施されている。

鈴木優人指揮で《リナルド》が、10月31

日に音楽堂室内オペラ・プロジェクトとして神奈川立音楽堂で1回、11月3日にはバッハ・コレギウム・ジャパンほかの主催で、東京オペラシティ・コンサートホールで1回実施された。

11月10日から5日間にわたって日生劇場の《ルチア—あるいはある花嫁の悲劇》が舞台上演の予定から90分の短縮版として、大幅に演出を変更しておこなわれた。田尾下哲演出により、主役のルチアが舞台上の壁に囲まれた部屋の中で、1人で歌い演じるという形式へと大胆に変更されている。主役の森谷真理と高橋維には大変な負担となっただろう。そのほかの男声の役や合唱は舞台袖で歌うという変則的な演出となったものの、コロナ禍が生んだ演出の新たなかたちとして特筆される。

1-7. コロナ禍による公演中止、延期：9月～12月

1) 大規模な公演の中止、延期

徐々に国内団体による公演活動が再開されつつある中でも再開の見通しがたたないのは海外からの大規模な招聘オペラ公演だった。ミラノ・スカラ座《トスカ》《椿姫》、イタリア・バーリ歌劇場《アイーダ》の各公演は中止となる。藤原歌劇団×ヴァッレ・ディトリア（マルティーナ・フランカ）音楽祭提携公演によるヴァッカーイ作曲《ジュリエッタとロメオ》は「ベルカントオペラフェスティバル イン ジャパン 2020」と題して実施予定だったが主役歌手などの来日が叶わずに延期される。

そしてこの時期、関西のオペラ団体も上演が再開できず多くの公演が失われている。関西二期会は、6月に続いて、10月の《ドン・ジョヴァンニ》などが全て延期・中止となっている。関西歌劇団は5月の《修道女アンジェリカ》に続き、9月の本公演チレーア作曲の《アドリアーナ・ルクヴール》が延期

となった。

その他の各地域の団体も活動停止を余儀なくされている。ひろしまオペラルネッサンスは9月の《ドン・ジョヴァンニ》、名古屋二期会は10月の定期公演《魔笛》2公演も延期となった。仙台オペラ協会《魔笛》は9月に第45回記念公演となる予定だったが延期される。北とびあ国際音楽祭はリュリ作曲《アルミード》を予定していたが2020年度の上演は見送っている。

オーケストラの定期演奏会も予定通りにはおこなわれず、東京フィルハーモニー交響楽団のバティストニ指揮による9月のザンドナーイ作曲《フランチェスカ・ダ・リミニ》、東京交響楽団のジョナサン・ノット指揮による10月の《トリスタンとイゾルデ》が中止となっている。

2) 市民オペラの活動

各地の市民オペラも大きな打撃を受けた。アマチュアの合唱やオーケストラの活動が、練習会場となる公民館などの一時的な閉鎖や貸出制限などで、練習ができなくなり完全に止まったのである。プロフェッショナルの団体や劇場・音楽堂等による公演が徐々に再開していく一方で、アマチュア合唱団が毎年、主催あるいは参加しておこなわれてきた年末の第九公演が各地で中止となるなど、多くの公演計画が消えていった。日本ではアマチュアが牽引してきた合唱活動、市民オペラなどの活動は、高齢化している合唱団員が集団活動への物理的、さらに心理的な障壁のために集まりにくくなるなどの問題を抱えたため、従来のような活動が十分におこなえない事態が続いたのである。

藤沢市民オペラの《ナブッコ》、川崎市民オペラの《ヘンゼルとグレーテル》、相模原シティオペラのマスネ作曲《シンデレラ》、新宿区民オペラの《イル・トロヴァトーレ》、群馬

オペラ協会の白樫栄子作曲《みづち》、杉並区民オペラ《椿姫》、横浜シティオペラの新倉健作曲《ボラーノの広場》、まつもと市民オペラによる信長貴富への新作委嘱作品《山と海猫》、調布市民オペラ《カルメン》、四日市市民オペラ《ラ・ボエーム》、長崎県オペラ協会の白樫栄子作曲の初演作《天の夕顔》、西日本オペラ協会「コンセル・ピエール」《コジ・ファン・トゥッテ》、弘前オペラ《こうもり》、富山県オペラ協会《カルメン》、調布市民オペラ振興会《カルメン》、伊丹市民オペラ《アイダ》、鹿児島オペラ協会《フィガロの結婚》、稲城市民オペラ《愛の妙薬》、愛知祝祭管弦楽団「ニーベルングの指環」など各地の市民オペラや市民オーケストラの活動は軒並み2020年の公演が延期または中止となった。

2. 2020年の特徴のある公演

2-1. コロナ禍での動き～新たな創作の潮流

2020年も新たな創作はおこなわれ、いくつもの作品が上演予定だった。その中で幸いにも、実際におこなわれた作品を確認しておこう。

日本オペラ協会の寺嶋民哉作曲《紅天女》は、日本オペラの新作としては異例の大規模会場での5回公演を実施、オペラシアターこんにゃく座の萩京子作曲《イワンのばか》は301席の豊島区あうるすぽっとで8回公演、新国立劇場の藤倉大作曲《アルマゲドンの夢》は新国立劇場オペラパレスで4回公演と多くの上演が計画実施された。

昭和音楽大学の竹内一樹作曲・宇吹萌台本《咲く～もう一度、生まれ変わるために》は、3か年にわたる「日本のオペラ作品をつくる」プロジェクトで最終選考に残り、演奏会形式で上演された。

上演会場に特色のあったのは、上賀茂神社で上演されたベンセクリ作曲《ガラシャ》。また、東京文化会館小ホールでの上演となっ

た《400歳のカストラート》は加藤昌則が多様な時代の作品を一連の舞台上演へとまとめあげた。《ヴォルフ イタリア歌曲集》はヴォルフ作曲の歌曲をつないで、岩田達宗が演出をつけたもの。簡易な舞台装置とはいえ、歌手たちの自然な演技とともに印象深い上演となった。

2-2. 人材育成の機会

びわ湖ホールでは、芸術監督による「沼尻竜典オペラ指揮者セミナー VI～《ヘンゼルとグレーテル》指揮法～」がおこなわれた。若手指揮者たちが沼尻芸術監督の指導を受けながら、各場面をびわ湖ホール声楽アンサンブルなどの歌手たちと共につくる機会である。そして、最終日の8月6日には《ヘンゼルとグレーテル》の演奏会形式上演（抜粋）がおこなわれた。

五島記念文化賞オペラ新人賞の研修成果発表として、キハラ良尚指揮による《魔法の笛》が演奏会形式、ナレーション付きにより、かつしかシンフォニーヒルズで上演された。同賞は長い間、新人アーティストの貴重な海外研修機会を提供してきている。

大学の後期にあたる9月以降の公演は大学によって実施の判断と対応が分かれた。毎秋に、各地の芸術系大学が学生の成果発表の場として実施しているオペラ公演もその多くが中止される。夏休みなど時間に余裕がある時に稽古を重ねて臨むだけに、集まることのできない状況では実施が叶わない。前述のとおり、昭和音楽大学は《ドン・ジョヴァンニ》、国立音楽大学は《皇帝ティートの慈悲》をそれぞれ学内会場で実施している。一方で東京芸術大学は《コジ・ファン・トゥッテ》の公演が中止となっている。同様に、新国立劇場オペラ研修所の発表会も中止に追い込まれている。玉川大学の《三文オペラ》公演はYouTubeでのライブ配信に切り替えて実施

された。

複数の鑑賞者育成の機会も失われた。日生劇場が中学生・高校生を招待して鑑賞機会を設定する「ニッセイ名作シリーズ」、および一般公演である「NISSAY OPERA」は6月予定の《セビリアの理髪師》の全公演が中止、11月の《ランメルモールのルチア》は《ルチア—あるいはある花嫁の悲劇》と題して大幅に演出内容を変更したうえで予定回数が上演された。新国立劇場の「高校生のためのオペラ鑑賞教室」は毎年7月におこなわれる公演が中止となっている。一方で、関西での10月公演は、パンデミックの間隙を縫って、ウィアム・ケントリッジ演出の《魔笛》が園田隆一郎の指揮で実施された。

文化庁の新進芸術家海外研修制度は、1年研修に歌手8名、2年に歌手2名がイタリア、オーストリア、ドイツ、スイス、フランスに派遣されている。感染症が拡大するなかでの研修となった。

3. オペラ制作を取り巻く環境の変化～コロナ対応

3-1. 例年どおりの助成事業 (オペラ団体への助成)

文化庁・文化芸術振興費補助金「舞台芸術創造活動活性化事業」は、日本芸術文化振興会を通じて助成がおこなわれている。オペラ団体で「年間団体支援（～2019年度）」および「複数年計画支援（2020年度～）」を受けたのは、東京二期会、日本オペラ振興会である。この枠組みでは、基本的に採択後3年間はある一定額の助成がおこなわれることになっている。さらに同事業では、単年度助成の「公演事業支援」枠では、関西歌劇団《アドリアーナ・ルクヴルール》、関西二期会《リゴレット》《ドン・ジョヴァンニ》、堺シティオペラ《愛の妙薬》など採択されていたものの多くが中止となっている。オペラシアターこ

んにゃく座の寺嶋陸也作曲《末摘花》、パッハ・コレギウム・ジャパンの《リナルド》など一部の公演は実施された。

同補助金は、公演前日までの創造活動経費を補助対象とし、公演当日の経費は対象外で、各団体に対しては、入場料収入の確保などの自助努力が求められるようになってきている。各分野で採択されていた活動のうち、2020年は実施できない公演が多かったなかで、助成対象経費に係るキャンセル料等の支出、さらに延期による2021年度への繰り越しなども認められることによって、一定程度の救済措置がとられた。

日本芸術文化振興会の芸術文化振興基金助成事業のうち、オペラやオーケストラなどの活動を対象とした助成事業である「現代舞台芸術創造普及活動」でも複数の公演が実施予定であったが、その多くが中止になっている。このほか「アマチュア等の文化団体活動」枠で助成を受けた団体の公演も複数中止となった。

上記は、日本芸術文化振興会から、各団体に配分されている助成金である。このほかに、文化庁の各事業から、オペラ公演に行われた助成をまとめてみよう。

「戦略的芸術文化創造推進事業」では、新国立劇場の《ニュルンベルクのマイスタージンガー》が採択されていたが同年の公演は中止となる。東京二期会の《ルル》、日本オペラ振興会のヴァッカーイ作曲《ジュリエッタとロメオ》も同事業で採択されたものの延期となり、それぞれ代替コンサートが企画実施された。

このほかに、「文化芸術による子供育成総合事業—巡回公演事業—」では、〈ミュージカル公演〉〈音楽劇公演〉〈児童劇公演〉〈合唱公演〉などで採択されていたが、多くの公演が中止や延期となった。この枠組みでの活動は、藤原歌劇団、東京合唱協会、オペレッタ

劇団ともしび、オペラシアターこんにゃく座などにより、9月以降徐々に再開されて、各地で巡回公演がおこなわれていく。

(劇場・音楽堂等への助成)

文化庁・文化芸術振興費補助金「劇場・音楽堂等機能強化推進事業」は、日本芸術文化振興会を通じて補助がおこなわれていて、地域の中核となる各館の主催事業が助成されている。当該事業には、[劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業] [地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業] [共同制作支援事業] [劇場・音楽堂等間ネットワーク強化事業] の4つの枠があり、各地の劇場・音楽堂等が主催事業に助成を受けている。神奈川県立音楽堂《シッラ》、滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール《神々の黄昏》(配信とDVD収録を実施)、「足利オペラ・リリカ」研究科の修了演奏会《子供と魔法》《ジャンニ・スキッキ》公演などはこの枠での採択だったが中止された。

他にも、文化庁からの直接助成事業が複数行われており、「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」では新国立劇場オペラ研修所公演が中止され、「大学における文化芸術推進事業」では、昭和音楽大学が《ドン・ジョヴァンニ》を上演、次の時代を担う若い人材を育成する事業を展開した。

このほか、日本芸術文化振興会の「芸術文化振興基金助成事業」のうち、「地域文化施設公演・展示活動：文化会館公演」の枠組みで、地方自治体などが設置した文化会館などの活動が採択されていた。第29回みつなかオペラによる景山伸夫作曲の《満仲～美女丸の廻心》は10月に実施されたが、3月の第34回伊丹市民オペラ《アイダ》は2022年に延期となっている。

3-2. 助成事業のあり方が問われる緊急支援策

世界を急襲したコロナ禍において、医療、福祉、雇用など、対応すべき事項の緊急性に

も起因して、各国の行政による財政対応が比較言及された。助成を出す側と受ける側それぞれの事情が同時に対立も生み出すなかで、日ごろの芸術文化助成への考え方の課題が浮き彫りになる。芸術団体への運営助成制度が確立されていないわが国では、事業を計画して実施しなければ助成申請ができない。コロナ禍により、新たな企画への難しさがある状況下で、運営助成へのニーズがあらためて明らかになる。こうしてコロナ禍が生み出したのはさまざまな境目である。助成をめぐる立場の違いが生み出した溝、アーティストや舞台製作にかかわる人材の雇用の危うさが生んだ働き方の違いも明るみに出た。そして最も人為的な境界である国境が越えられないという事態も生んだのだ。

ここで日本政府の緊急支援策をまとめてみよう。補正予算が組まれたものの2020年度中には執行されずに2021年度に創造活動を援ける施策として活用された事業も含めた。2020年度から2021年度にかけてのコロナ禍にかかわる文化芸術への政府支援の総額は3,531億円とされる(2021年10月25日、文化庁文化政策部会資料)。内訳は、文化庁による第1次～第3次補正予算および予備費支出をあわせた1,256億円、経済産業省による第1次、第3次補正予算および予備費による支出の総額2,275億円をあわせた金額である。公演事業に対する支援、オンライン配信に対する支援、施設維持に対する支援などが混在する内容となっている。

とくに大きく取り上げられたのは、文化庁の第2次補正予算の560億円に上る支援額である。支援時の配分、事務手続きなどについては、開始準備までの時間の制約もあって、混乱を極めることになる。書類提出など手続きの煩雑さ、支援が届くまでに時間がかかるなど支援する側、受ける側の双方に負担がのしかかった。

図表1 芸術創造活動などへのコロナ対策費一覧（2020年度のみ、一部スポーツも含む）
【文化庁】1,076億円

予算名	総額	補助事業名	金額
第1次補正予算	61億円	子供たちの文化芸術体験機会の創出事業	13億円
		生徒やアマチュアを含む地域の文化芸術関係団体・芸術家によるアートキャラバン	13億円
		最先端技術を活用した文化施設の収益力強化事業	14億円
		文化施設の感染症防止対策事業	21億円
第2次補正予算	560億円	文化芸術・スポーツ活動の継続支援	509億円
		文化芸術収益力強化事業	50億円
第3次補正予算	455億円	コロナ禍を乗り越えるための文化芸術活動の充実支援事業（ARTS for the future!）	250億円
		大規模かつ質の高い文化芸術活動を核としたアートキャラバン事業	70億円
		日本博イノベーション型プロジェクト	10億円
		子供のための文化芸術鑑賞・体験支援事業	40億円
		文化施設の感染拡大予防・活動支援環境整備	50億円
		文化資源活用推進事業	8億円
		文化資源の高付加価値化の促進	8億円
		地域無形文化遺産継承のための新しい生活様式支援事業	2億円
		地域ゆかりの文化資産を活用した展覧会支援事業	2億円
		博物館等の国際交流の促進	4億円
		国立文化施設の機能強化	11億円

【経済産業省】1,649億円

予算名	総額	補助事業名	金額
第1次補正予算	878億円	コンテンツグローバル需要創出促進事業	878億円
第3次補正予算	456億円	コンテンツグローバル需要創出促進事業	401億円
		コンテンツグローバル需要創出促進・基盤強化事業	55億円
令和2年度予備費	315億円	コンテンツグローバル需要創出促進事業費補助金	315億円

図表1は2020年度に発表されたコロナ対策に関する事業費一覧である。前頁の2021年度も含めた合計金額とは異なることに注意が必要である。

このほかにも、持続化給付金事業など、中小企業や個人事業者への支援策などもあった。創造活動を継続するための支援のほかに、生活者として生きるための支援もおこなわれたのは各国同様である。突然の大型助成によって、受給手続きでは大きな混乱を生んだ各事業ではあるが、楽団員を雇用するオーケストラなどの事業者から、団員雇用はおこなわないオペラ団体、スタッフを雇用してい

る舞台製作関連の企業、アーティスト個人に至るまで、支援を届ける努力が確かにおこなわれた。

加えて、地方自治体による活動再開にむけた支援事業も活用されていった。東京都による「アートにエールを！東京プロジェクト」も多くのアーティストが応募した。

2021年にも「ARTS for the future!」など、2020年同様の支援事業が実施されたが、これは2021年の活動が対象となるため、次号の年鑑での記録としたい。

3-3. グローバル展開の転換

1) 国際共同制作への視点

2020年1月17日には文化庁ほかの主催による国際共同制作に関する国際シンポジウム「舞台芸術における国際共同制作の最前線 -World Opera Meeting in Tokyo 2020」が開催される。ゲストには、ヨーロッパを中心とする歌劇場などの国際組織を統括するニコラス・ペイン（オペラ・ヨーロッパ事務局長）、ベルギーからは、オペラ界の30代～40代の次世代のリーダーたちを指して言う「ネクスト・ジェネレーション」の代表格で、先進的な舞台を送り出しているヤン・ヴァンデンハウア（オペラ・バレエ・フランドレン、オペラ芸術監督）を迎えて、オペラ制作、アーティストなどのグローバル化が一層進むなかで、国際的な共同制作の概念や手法、そして国の枠組みを越えた協働の現状を共有する会だった。

舞台芸術への興味と関心が国境を越えて広がるなかで、欧米を中心とした劇場間の協働は拡大の一途を辿り、大規模な舞台制作のプロジェクトや新作委嘱、あまりとりあげられない作品の蘇演やシリーズの企画には、劇場間の協働による制作が不可欠となっている点などが確認された。日本の劇場や歌手、プロジェクトがオペラの世界的マーケットに加わろうとする理由は何なのか、そのために必要となる事項などについても、話し合う機会となった。世界全体で大きく動いている芸術市場のグローバル化への視点が焦点となり、会場の国立新美術館は多くの聴衆を集めた。

2) 国内人材の活躍

2020年2月後半以降は、海外からの来日アーティストが参加する公演は全くおこなわれなくなった。そうした中で、リモート演出などの工夫もおこなわれるようになる。来日後2週間の隔離期間を経て公演に参加した

ケースもある。リディア・シュタイアーは藤倉大の新作《アルマゲドンの夢》演出のために来日し、隔離措置を経て公演に参加した。

藤倉をはじめ、大野和士や沖澤のどかなど海外在住の日本人アーティストたちも、同様の措置に対応しながら、国境を越えて公演に参加している。多くの海外在住アーティスト、招聘アーティストたちの来日に、コロナ禍は大きな障壁として立ちはだかった。その一方で、パンデミックによる公演中止や延期公演の影響により演奏機会の減った国内在住のアーティストたちが逆に活動を獲得する機会となった。

3) 海外の歌劇場の状況

12月2日には、昭和音楽大学主催によるオンライン・シンポジウム「我々はいかにして劇場を再開させるのか？一劇場トップが語る日本とドイツの現在一」が開催される。ベルリン・コーミッシェ・オーパーの次期共同インテンダンティンであるズガンネ・モーザー、びわ湖ホール芸術監督の沼尻竜典、京都大学の岡田暁生を迎えて、コロナ禍を経たオペラ劇場の再開に向けた取り組みを共有する機会となった。ドイツは2020年3月以降のロックダウンを経て、ようやく9月に劇場が再開し始めたのだが、再度の感染拡大により国内でロックダウン措置がとられるなかでのシンポジウムとなった。オフエンバック作曲の《ジェロルスタン女大公殿下》の上演では、舞台上のソーシャル・ディスタンスを確保するために、兵士の衣裳にすその広がったスカート状のデザインを取り入れるなどの工夫がなされたことが紹介された。沼尻芸術監督からは、びわ湖ホールでの声楽アンサンブルによる公演映像が共有され、世界各国の歌劇場がパンデミックと戦い、新たな公演の形を模索するリーダーたちの姿勢が強い印象を与えた。

4. 何が失われ、何に気づかされたのか

順調に滑り出したかに思えた2020年のオペラ界は、一時期完全に動きを止めることになった。国境が閉ざされ、人びとの移動がかなわなくなり、緊急事態宣言下で日常生活ですら制限されるなかで、公演や制作活動ができなくなったのである。世界中がワクチンの開発を待ちつつ、上演の工夫による模索が始まっていく。コロナ禍の最中であって、確実に人びとが創造活動のために動き、組織が次に向けた活動を再開していったのである。

パンデミックで音楽界は何を失い、何に挑戦したのだろうか。

何世紀にもわたって成立させてきたチケットを販売してコンサート会場で演奏会を開催するという形態が実施できなくなった。そのため、これまでと全く異なる発想の転換が迫られたのである。

次善の策として、各企画はオンライン配信を手段として選ぶことになる。コロナ禍を経て、オンライン配信が今後どのように継続されるのだろうか。

いまや配信のプラットフォーム自体が多様化の一途を辿り、把握すら困難な状況にある。そうした中、映像ディレクションも含めたクオリティが課題となっている。もちろん公演内容の芸術的な質の確保が必須となることは間違いない。

公演ができないことで、これまで活性化していたように感じられていた舞台芸術、文化芸術界の見えなかった弱点が可視化されたと言える。我々は何に気づかされたのだろうか。まず、創造活動に携わる人材雇用や組織体制の脆弱さ、支援の仕組みの不備があげられるだろう。歌手やスタッフといったフリー

ランスで働く人材がいかに弱い立場に置かれていたのかが浮き彫りになった。さらに、地理的、時間的な距離を越えようとする協働に立ちはだかつてきた障壁、国境という人為的な境界がつくる制度の相違は、オペラの世界のトレンドとなっていた物理的なグローバル化への流れを一旦断ち切ったと言える。公的資金の投入においても、緊急時対応、継続に向けた支援の方途など多くの課題が見えた。この気づきが次にどう生かされるかが、今後の文化芸術の展開を左右する。

一方で、グローバル化の一途をたどっていた世の中の流れが方向を転換し、地域の資源であるアーティストや組織との協働を考え始めたのも確かだ。これからの社会において、アーティストたちの活動はどのように発信されるのだろうか。未曾有の危機の中、舞台上演の代替としての映像配信が必須となってからというもの、映像に関するさまざまな対応が並行して措置されるようになった。会場内の限られた人たちだけが鑑賞できた演奏会は、その多くが配信されるようになり、コンクール審査も世界で同時配信を通じて見守ることができるようになった。コンテンツの魅力を通じて、聴衆や観客に選ばれる方策を探り、届ける手法の開発と洗練が必要になったともいえる。

実演家、指揮者、演出家、そして舞台をつくるスタッフや制作者、そして資金を配分する側の知恵と技術の粋、さらに努力の積み重ねで成立するものだ。こうした動きが、時限的な対応としてではなく、コロナ禍を越えてどのように展開するのか、そして転換点となるのだろうか。今後の継続的な検証が必要となっている。